



第 30 回看護の日事業

看護職員等からの体験談

当協会は、平成 20 年度（第 18 回）から「看護の日」にちなんで、「新人看護師からの体験談」を募集し、優秀作品を表彰してきました。平成 26 年度（第 24 回）からは、看護師養成機関からも募集するようになり、今年度は 167 件の応募がありました。どの作品にも、患者さんとの関わりを通して学び、看護への思いを深め、さらに気持ちを新たに看護に取り組んでいこうとする思いがあふれていました。

応募して頂いた方々をはじめ、各施設の皆様に心より感謝申し上げます。
その中から、受賞者 6 名の作品をここに紹介します。

受 賞 者

最優秀賞 1 名

田中 夏美 (高岡市民病院)

優秀賞 2 名

寺井 久美子 (富山市立富山市民病院)

南塚 蘭琳

特別賞 3 名

一谷 志津子 (厚生連高岡訪問看護ステーション)

内田 裕子 (富山市立看護専門学校)

引網 治枝 (医療法人社団紫蘭会 光ヶ丘病院)

参加賞 161 名

公益社団法人 富山県看護協会

最優秀賞

もう一度、ソテツの花を見せてあげたい

高岡市民病院 田中 夏美

緩和ケア病棟に勤務していると自宅退院を望む患者に多く出会う。S 状結腸がん終末期である A さんもその 1 人であった。症状コントロールができ次第、在宅復帰することを強く希望していたが、全身状態低下に伴い終日、ベッドの上での生活となった。そのような中、A さんの妻は本人の自宅に帰りたいたいという思いを尊重し、外出を希望された。A さんの自宅には、家を建てたときに植え、長年夫婦を見守ってきたソテツの木がある。入院中にその木が 3 年ぶりに綺麗な花を咲かせた。その花をもう一度見せてあげたいと妻は感じていた。そんな夫婦の希望を叶えるため、看護師同行のもと数時間の外出を行うことにした。

外出当日は、長男が作成した「お父さん おかえりなさい」という飾りつけと、この日のために県外から駆け付けた長女、仲のいいご近所の方に出迎えられた。玄関先でストレッチャーに寝たままソテツの花を眺めた A さんは、笑顔で拍手をし、自宅に入ると病院では見たことのないほっとした表情をされた。A さんは、病院内よりも言葉数が多く、コミュニケーションを楽しむ姿を見た妻は「こんなに喋っている主人は久しぶり」と涙を流していた。帰院後、A さんは「今日はとても良い日だった。ソテツも綺麗だったなあ。ありがとう」と笑顔で話した。外出後は、以前よりも表情の穏やかな日が続き、ラウンジで開催されるお茶会や花火鑑賞などのイベントに参加され、家族やスタッフとコミュニケーションを取る機会も増えた。

外出から 2 週間後、A さんは家族に見守られながら永眠された。妻は、「外出できて本当に良かった」と涙を流しながら満足そうに話していた。

A さんに出会い、患者や家族の希望を叶えることの難しさを改めて感じたのと同時に、始めから外出困難であると決めつけずに、実現に向けて必要な態勢を整えていくことで可能性は広がり、QOL（生活の質）向上に大きく影響を与えることを学んだ。患者とその家族が今までの人生に何を思い、残された時間に何を大切に、望んでいるのかを捉え、心に寄り添いながら同じ歩幅で歩いて行ける看護師を、目指し続けたい。

優 秀 賞

患者さんの信頼に勇気づけられて

富山市立富山市民病院 寺井 久美子

看護職に就き、37年になる。その間、たくさんの患者さんとの出会いと別れを経験してきた。中でもNさんとの関わりは今でも鮮明に記憶に残り、私の襟を正してくれる出来事だ。

あれは、私が外科病棟に就職して2年目のある日、病棟の師長がCT室からの電話を私に伝えてきた。「Nさん、今CTにいるのだけど、造影剤の注射がどうしても入らないんだって。患者さんが、あなたを指名しているそうだけど、行ってくれるかしら」

Nさんは、乳がんの手術後の方で、いつも注射が入りにくいと病棟内でも知られた患者さんだった。思わず「えっ、私ですか」と聞き返したが、「指名されるなんて看護師冥利に尽きることだから、頑張っておいで」と言われ、なぜ自分が呼ばれたかも理解できないままCT室へ向かった。

CT室に到着すると、ベテランの放射線技師から「はあ、お前か。こっちは入らんから困って電話しとるがに。まあ、お手並み拝見とするか」。そう言われて、ようやく自分がとんでもないところに来てしまったことに気付いた。私はNさんに声をかけて注射の準備をした。

案の定、全身冷や汗をかきながら、血眼になって血管を探すが分からず、注目される中で逃げ場もなく、絶体絶命のピンチだと思った。せっかく私を指名してくれたNさんには申し訳ないけれど、これは私には無理だと思い、Nさんになぜ私を指名したのかを尋ねた。すると、「大丈夫よ。あなたなら入るから」と言われ、そんな根拠のない言葉に伝える自信は全くなかった私は、その気持ちを正直に伝えてしまった。その時にNさんが言った言葉が、何年たっても私の心に突き刺さって離れない。「本当に大丈夫だから。思いきりしてちょうだい。私、あなたになら何回刺されてもいいよ」。なんて言葉だろう。病氣と闘い、更に痛みとも闘っているNさんの言葉に背中を押され、私は覚悟を決めた。Nさんの思いに応えたくて、全神経を集中させて必死の思いで注射に挑んだ。そして、奇跡的に一発で入った。「ほらね、入ったでしょ。初めからあなたなら入れてくれると信じていたよ」。Nさんの言葉に、私は全身の力が抜けるのを感じた。

新人の頃のこの強烈な体験は、どんなに歳月が流れても決して忘れることがない。注射をする時にはこの出来事が脳裏をよぎり、笑顔で患者さんと向き合いながらも初心に帰る。「真剣勝負だ。そして、これからも私たち看護師は、病気で苦しむ人々に寄り添い、ともに闘う同志となるために、信頼してもらえるよう日々自己研鑽（けんさん）していかなければならない」と思う。

優 秀 賞

いのちの伝承

南塚 蘭琳 (かりん)

昨年5月、小学5年生を対象に「命の教室」を開催する機会を得た。うれしい反面、助産師経験の浅い私が実施しても良いのだろうかとの不安もあり複雑な気持ちだったのを覚えている。

いよいよ命の教室本番となった。緊張しながら会議室の扉を開くと、生き生きとした表情の児童が座っていた。その表情を見て私は少し緊張を解くことができた。授業内容で工夫したのは、児童に見て触れて体験してもらおうという点である。折り紙に針で穴を開け、お米をつけ、受精卵の大きさと妊娠1カ月の胎児の大きさに例えたり、胎児モデルを抱いてもらったりし、「命」を実感できるようにした。児童は折り紙を光にかざして針の穴をのぞいたり、大事そうに胎児モデルを抱いたりしていた。

そんな中、授業で一番感嘆の声が上がったのが、「精子と卵子が出会う確率は250兆分の1です」。そのひと言と1枚のスライドだった。「えっ、0が1、2、3…、13個もある」「すごい」。そう発言する児童の瞳はキラキラとしており、その瞬間は強く印象に残っている。この確率は宝くじが当たるよりも低い。自分たちがそれほど稀有な存在であることを知ってほしい、そんな思いを込めた言葉であった。

私が一番伝えたかったことは、命を授かったあなたたちは、とても大切な存在、宝物。だからこそ自分も周りの人も大切にしてほしいということだった。このメッセージが児童の心に伝わってくれたらと願う。

私が命の教室で学んだことは、助産師の役割は分娩介助だけではないということである。

児童たちは将来、新しい命を育み、親となっていく。この時期に命の大切さを学ぶことは、未来へと命を伝承することにつながる。助産師は命のリレーを手助けする役割も担っていることを学ぶことができた。

今回の命の教室が児童の未来の一助になればと思う。そして、授業中の児童の輝く瞳は、今後、私が看護師・助産師道を歩んでいく上で、大きな糧となっていくだろう。

特別賞

看護の可能性を求めて

厚生連高岡訪問看護ステーション 一谷 志津子

それは私が訪問看護に勤務してまだ間もないころでした。担当したAさんは、20代で脳疾患により寝たきりとなり、気管切開、胃瘻（いろう）造設の状態でした。頸部や上肢に拘縮もあり全介助を要しましたが、Aさんのお母さんは、Aさんを日中は服を着替えて車椅子で過ごさせ、外出や入浴など同年代と同じようにしてやりたいとの強い思いがありました。お母さんは「調子がいい日はジャンケンができるのよ」と話していましたが、たまに視線が会ったり、指が少し動いたりすることがあるくらいで、私にはなかなか信じられませんでした。

ある日のこと、テーブルに向かって座っているAさんの手にボールペンを握らせると、手の下の紙に何かを書いたのです。何気なく見ていた私は思わず「えっ」と声を上げていました。書き上げたものは豆粒を塗りつぶしたようなものでしたが、ペン先の動きを見ると、それはまぎれもなくAさん自身の名前だったのです。「Aさんにはしっかりと意思がある」。そう確信した瞬間でした。上肢の筋力低下があり、肘を動かすことができなかったのです。キャスト付きの腕を乗せる台を提案すると、お母さんはすぐに準備され、次の訪問時にはAさんはそれを使い、腕を左から右に移動し自分の名前を書くことができていました。まだまだAさんのことを知りたい。Aさんができることはないか。そのため私ができることはないか。それはしばらく忘れていた感情でした。

それから数年の関わりの中、お母さんのAさんへの深い愛情と主治医の理解、多くの人の協力を得て、Aさんは言葉を取り戻しました。自分でスプーンを持って経口摂取ができるようになり、車椅子からトイレに移動することもできるようになりました。私にとっても、看護をする喜びと自信になり、長く在宅看護を続ける力になりました。

今年、定年退職を迎えますが、ふと思い出すのは、はにかむように「一谷さん」と呼ぶAさんの笑顔です。

特別賞

洗髪が運んできた面会

富山市立看護専門学校 内田 裕子

実習で受け持った患者さんは、両変形性膝関節症で両人工膝関節置換術を受けた 60 代の女性だった。

受け持ち 1 週目は、患者さんは膝を動かすことの痛みと恐怖のため、ベッドで寝ていることが多く、コミュニケーションを取ろうとしても、うなづく程度であった。私は痛みでふさぎ込んでいる患者さんとほとんどコミュニケーションが取れないことに対して不安と戸惑いを感じていた。

受け持ち 7 日目、疼痛（とうつう）コントロールができるようになり、会話が増え表情も明るくなってきた患者さんに洗髪を提案した。患者さんは 1 週間近くお風呂に入れておらず、洗髪の提案に対し喜んだ表情であった。1 日髪の毛を洗わないだけでも頭皮からでる汗や皮脂によりかゆくなったり、ベトベトするのに、しばらく洗えていない患者さんの不快感はとても大きいと感じた。

洗髪後は「スッキリした」「髪の毛ふんわりしたね」と笑顔で話され、私が下手な洗髪技術に申し訳なさを感じるほど喜んでもらった。私は先週、痛みで苦しんでいる患者さんを見ていたこともあり、患者さんに笑顔が戻ったことと喜んでもらったことに、看護学生をしていてよかった、看護とは笑顔をもらったりあげたりすることなんだと、あらためて感じた。

洗髪し数時間経過したところで、遠方に住んでいる患者さんの妹さんと姪っ子さんが面会に来た。

患者さんは突然の訪問に驚きつつ、とてもうれしい様子で数時間おしゃべりの花が咲いたようであった。「突然来たからびっくりしたけど、すごくうれしくて、いろいろ話しちゃった。姪っ子は看護師をしているんだけど、おばちゃんすごく元気そうで安心したと言われたの。髪を洗ってもらって本当に良かった。綺麗な姿で会えて本当に良かった」と言われ、私は洗髪のタイミングがよかったくらいにしか思っていなかった。

受け持ち 9 日目に再度、洗髪を行った。するとその日の夕方に、患者さんが働いている職場の人が面会に来たのだ。「また洗髪してもらった後に、きょうは職場の人が来たよ。綺麗になったタイミングで来るからびっくりするね。あなたが髪を洗ったら、いいことがあるわ」と言われた。偶然であると思うが、私が洗髪をすると患者さんに誰かが面会に来るのだ。私も驚くと同時にとてもうれしく、私ではなく患者さんの笑顔が面会の人を引き寄せているのだと感じた。

洗髪は頭を清潔にするだけでなく、患者さんの喜びと笑顔を引き出し、周囲の人を引き寄せ、みんなを笑顔にする看護援助なんだと実感した。この気持ちを忘れないよう看護の道を進んでいこうと思う。

特別賞

ハイタッチ

医療法人社団紫蘭会 光ヶ丘病院 引網 治枝

脳性まひを持つ 50 代の B さんは肺膿瘍の治療を終え、再入院されました。食事は経鼻経管栄養、吸痰も必要、大好きな車椅子に座ることもできず、ADL の低下は顕著でした。

先生からは声を出すことと、座位の時間を取るよう言われたため、単語で返答できるような声かけから始めました。調子のいい時は「おはよ」「うん」が出ましたが、元々文字盤でコミュニケーションを図っていた B さんにとって、発語はうまくいく日ばかりではありませんでした。文字盤も不随意に動く手がどの文字を示しているのか理解してあげることができず、B さんはもどかしさで憤っていました。これまで共に歩んできた文字盤を何とか活用したいと模索していたある日、手と共に目が文字を追っていることに気付きました。目を見つめると追っている行が見え、その行を絞り、文字を更に絞ると単語が見えてきました。ようやく言葉を見いだせた時の B さんの満面の笑み、私も心が通じたようでうれしく、2 人で大声で笑い、ハイタッチしました。最高にいい笑い声でした。

少しずつ元気になり、天気の良い日は外へ散歩に出ました。高く澄み渡る空に広がるうろこ雲、B さんの目線に合わせて景色を眺め、爽やかな秋の初風を一緒に感じました。その横顔からは回復の兆し、生の強さが感じられました。

そんな日々を重ねていましたが、転棟となりました。寂しさはありましたが、いつかまた会えると思い仕事に没頭していたある日、廊下を急ぐ私の耳に「おーおー」と聞きなれた声が聞こえました。振り返ると私を見つめる B さんです。すぐに駆け寄り「私のこと気付いてくれたんですか」と尋ねると、全身をばたつかせ、くしゃくしゃの笑顔で大きくなずかれました。私のことを忘れずにいてくれたこと、声を出して呼んでくれたことがとてもうれしく、愛しさで胸がいっぱいになりました。

何年経験を積んでも看護に悩み、迷うことがあります。でも、その答えや大事なことを教えてくれるのは、いつも患者さんです。患者さんの思いを感じることができるよう、今日も私は患者さんの元へ歩を進めます。ハイタッチできる日を願って。



ナイチンゲール生誕 200 年 ～「看護」は世紀を超えて進化する～

「看護の日」制定の趣旨

看護の心は、大人も子供も、病気や障害のある人もない人も、年齢・性別を問わずお互いを思いやる心です。この看護の心、ケアの心、助け合いの心について理解を深め育ていけるように、近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなみ、1990年に5月12日が「看護の日」として制定されました。

令和2年度看護職員等からの体験談

発行 公益社団法人富山県看護協会・富山県ナースセンター

〒930-0885 富山市鶴島字川原 1907-1

TEL 076-433-5251 FAX 076-433-5281

URL <http://www.toyama-kango.or.jp>